新しい國語教育をもとめて（一）

藤原與一

これからの國語教育をどうして行つたらよいか。これは誰しも深く考えさせられていることである。何かこゝで一つ、ふみ切らなければならないことは、よくわかる。かと言つてたゞわけもなく新規を追うのでもいくまい。正しい認識にもとずいて、助長せしめるべきは助長せしめ、ひやく發展せしめるべきはひやくせしめることが必要であろう。

第一に問題としてよいのは、いつたい、國語教育とは、何をどうすることなのかということである。

一　國語教育の國語

國語教育とは、國語の教育である。してみれば、その國語とはどんなものであるかということは、一番根底の問いにならなければならない。これまでの國語教育では、國語がどんなものであるかをしつかりとつかむことは、よくなされていたであろうか。新しい國語教育をもとめるもとめかたは、まずこの反省からなされねばならないと思う。

國語が何であるかは、わかりきつたことのように思われやすい。なるほど、これは毎日自分がつかつているものでありしやべつてもいるものであるから、わかりきつたもののようである。けれども、そのことがはたして、どんなにまとまつた國語把握になつているであろうか。國語問題などとは言うけれども、その時の國語とは、どれほどよく、日本語のすがたをつかんだものになつているであろうか。自分でへいぜい國語に生き、やす〳〵と國語生活をしているので、國語と言えば、とかくわけもなくかんたんにこれを考えがちである。そのじつ、國語をどうするかという問題になると、何をどうすればよいのか、かんたんにはわかりかねるのがつねである。國語の觀念は、うすぼんやりとしたものであつた。すくなくとも、これをくわしく考えつめてみようとする態度は、これまでに缺けていた。國語の教育をしようとするのに、その國語が、現にどんなものであるかを見つめることがなくて、しつかりとした國語教育ができるであろうか。今は、日本語の大きい動きの見られる時である。これは、誰の眼にもよくうつつていよう。今日の國語教育が、この動きを無視してよいわけはない。無視したのでは、今日に必要な國語教育はできない。國語が大きく動きつゝあれば、よくその動きを見つめ見きわめて、日本語發展のすじあいをつかみとり、新國語教育は、時勢の先頭に打立てられなければならない。

今の國語問題をはなれて、國語教育はない。國語問題が問題とされるのは、これを國語教育によつて解決し善處するがためである。現在の國語教育は、現在の國語に對する十分の認識と十分のとらえかたとなくしては、どうにも進めようがない。いつの時代においてもそうである。國語教育は、まずその國語をとらえなければならない。とらえてはじめて、國語教育ははじめることができる。

もとより、國語の大きなつかみかたが、そう〳〵てがるにすぐにできるものではあるまい。廣く深く國語をつかみ、國語がどんなものであるかを知ると言つても、力にはかぎりがある。さういう點で、はじめから、完全な國語把握をのぞむことは無理である。しかし、今は、そうのぞんで出るということが大切である。誰しも、完全な國語把握など、容易にできるものではなかろう。たゞ、そうのぞんで出るといふ態度そのもとめる心、もとめてやまない良心が肝要なのであり、そこにこそ、國語教育は實行される。

國語とは何かというような、きまりきつた問いが、これからの新しい國語教育をもとめてゆくうえに、じつは根本の問いになる。きまりきつたようなこの點への反省のよくゆきとどくのに正比例して、今後の國語の教育は、しつかりと打立てられる。考えふるされたことのようではあるが、すこしでも新しい立場をきずかうとすれば、その原頭において、まず

認識しなければならないのが、國語教育の國語である。

國語教育をするということは、極端な場合として、文法をたゞに文法として教えるというような場合と、たのしい讀みものや、ためになる讀みものなどを讀ませて、内容を體得させ、本人の精神生活を高めるというような場合とに、分けて考えられなくはないか。もとより、その讀方教育にしても、たゞちに内容を玩味させて、文章内容がよく本人の血肉となることを期する以前に、國語の形式陶冶を念とすることは多い。小學校の讀方教育は、むしろそれを主眼としてきたと言つても、さして過言ではあるまい。が、いずれは、高い程度の讀方教育に達し、讀むことが本人の教養を高め、精神生活を向上せしめることになるのでなくてもならないとすると、やがて、内容を讀ませる國語教育が考えられてくる。下級の小學校では、讀方教育として、讀解力・解釋力・理會力そのものの訓練、すなはち形式陶冶をおもにしてゆく。やがて上級の學校になれば、その力の訓練と共に、進んで、その文章から、有意義な内容をつかみとらせ、おの〳〵が、その精神生活を高めてゆくようにしむけるところがなくてはならない。こうなれば、國語教育というこれまでのわくは、とりはずされることにもなるであろう。國語そのものの形式陶冶を任とする國語教育は、せまい意味の國語教育である。それに對して、右のような、内容攝取を本體とする深い讀みの國語教育は、廣い意味の國語教育と言わなければならない。その讀みのためには、どのような文藝も、科學も哲學も、あるいは道德も、その表現としての文章は、たゞちに讀みの素材・對象・資料になる。自然科學の文章を讀むこともまた、普通の國語教育のしごとになるのであり、理科の本を讀んでいても、國語教育になる。こうなると、讀み、かつ讀ませる指導はあつても、あえて國語教育と言わなければならないものはなくなるとも考えられないことはない。すなはち、これまでの意味のような國語教育のわくは、必要でなくなる。こういうような、内容を讀む國語教育、國語教育と限定しなくてもよい廣い意味の國語教育讀方教育を考えてみる時に、その内容を盛つた國語というものが、まさに具體的な國語として、しみ〳〵と考えさせられてくるのである。讀方教育なり國語教育なりを、どう考えるかは自由であるとしても、右のような一つの考えかたをしてみれば、その、いわゆる内容を持つた國語というものが、つまり國語の實體が、はつきりと考えられてくるであろう。國語教育を遂行するに當つては、このような具體的な國語によく思いをいたし、それを十分にとらえる必要がある。でなくては、その時代々々にあつて、文字通り、その時代の國語の教育をやつてゆくことはできない。

讀方の教育でなくて、表現指導の教育、いわゆる綴方教育などにしても、その時代に、その時代の子が、時代の人とし

て時代の聲をつぎるのに、時代のことばに卽應しないということはない。これの指導もまた、その時代の表現として、適切なものであるかないかをためさなくてはならないであろう。そのしごとの前提には、動きつゝある時代語の現實のすがたの十分な把握がなくてはならない。時代の具體的な國語を知ることなくして、子供の、時代の新人としてのあどけない時代語のさびは、引き上げようもない。具體的な國語が、どう動きつゝあるかを達觀することによつて、兒童の國語表現を正しくみちびき、發展させてゆくことができよう。いずれにしても、先立つものは、具體の國語に對する健全な認識と把握とである。

日本語は、明治以降に、きわだたしい變化發達をとげてきた。それ以前にも、漢語の影響はまことに大きく、そのために、日本語は大きな變動をとげたしだいではあるが、それにしても、明治このかたのことを考えてみると、それまでのことは、明治以後のこととあい對するものとして、おうよそ一くゝりにして見ることができる。それほど、明治以來の國語は、うつりかわりのはなはだ大きなものであつた。西洋文明を取入れたのと共に、國語は大きく變動してきたわけである。たゞに、西洋語流のものの言いかたが入つて、國語が變動を起したというのではない。それは國語の形式觀である。西洋文化の攝取と共に、日本語そのものの內容が、大いに變つてきたのである。一つのものを知ることができれば、もうそれを知つた者として、それにふさわしくものを言う。知つた境地、わかつた境地で、ことばをつかう。そうなつて、ことばは變動してくるわけである。新しい內容を盛るのには、新しい革袋をと言うが、新しいものがどし〳〵と入つてきてそれが國民の生活のちえになつてゆくと共に、國語は、內容的に自然に變動してきた。革袋、國語の一切の形式・形式關係は、自然に變動してきたのである。目立つた構文上の變化たとえば、「何々せざるを得ない」とか、「であろうところの」とかの言いかたが行われるやうになつたばかりではない。目立たないところでも、ちようど、一冊の書物を讀んだ人が外面なにげないようでも、じつはその書物の影響で生れ變つたような心境の人間になつて、もう人柄が變つているというようなのにもひとしく、國語は變つてきたのである。

現代がまた、いちじるしい變動期になつている。すでに以前から、日本語は海外にひろまりつゝあり、今日はまた、特に米英語との關係の密接な時である。現代日本語の樣相は單純でない。

國語の教育に當つて、國語をかえりみるとなれば、とりあえずのところでは、まず明治以降のことを考えてみておくのでよくはないか。その一つには、明治このかたの小說の文章

を讀んで見るのも方法である。そうして、たとえば、それの漢語漢字を中心として見ても、今日までに、國語の表現法がどのように變つてきたかがわかる。一口に言えば、かつては、漢語ばりの文章であつた。それはそれとして美しいものであり、文章の獨特のゆたかさとうるおいとを出したのであるが、一面にはまた、日常のはなしことばには遠かつたと言えよう。今日では、小說の文章は、ぐつとくだけてきている。いわば、はなしことばに近い。新しいものになると、その點がよほど進んでもいる。一般に、前よりは、漢語の少いものになつている。國語問題として、國字の問題がやかましくて、漢字を用いることばは、しだいに淘汰されようとしているが、それは、このような國語表現法のうつりゆきにあい應ずるものである。いつたいに、國語は、やさしい國語、わかりやすい國語えとうつつてきたと見ることができよう。かなづかいなどが問題になつてきたのも、今日われ〳〵の學ぶべき新知識のあまりにも多くて勉强にいそがしい時に、これは、敎育上のよけいな負擔である、というような考えかたからでもあつたと思う。そこには、新しい文化財をになつた時代の國語そのものの、內容的な厚み・重さが、ねらいとされているとも解されよう。

現代の國語は、また一だんと簡素化されようとしている。人々の言語生活の態度は、ことに進步的な人々の場合は、かなり大膽に、變えあらためられつゝある。今までのかたにとらわれない、思いきつて新しい言いかたをしてゆこう。それでものを考えようというような態度は、そうとうに見うけられる。そのために、國語の傳統に對して、やゝ度をすごした觀察を下したりしていることも、また見うけられないではないが、ともかく、國語を、この世代にもつともふさわしいものとして生かそうとして努力していることは認められる。國語の表現法は、そうとうに變動してくるであろう。新しい世代の新しいことばとして、國語は、新知識・新文物・新生活と共に、その內容にしたがつて、大いに變動してくるものと見られる。古いかなづかいはとゞまらなくなるであろう。かなづかいという觀念そのものが、もうなくなつてくることかと思う。漢字・漢語の地位も、よほど變つてくることであろう。漢字・漢語にこだわらない、むしろ、それからぬけきろうとすることばづかいが、つとめてなされるようになるものと思われる。敬語に對する考えかたも、一般には、かなり動きつゝあると見てよいか。そこには、敬語に對する認識の不足もあるとしても、敬語がだん〳〵と簡素化されようとしていることは、見のがせない。右のような國語・國字の問題はこのせつ、痛切な問題として、一般に深く注意され、强く考えられている。それだけ、現代の國語は、大きく變動しつゝあるわけである。これまで、議論の多かつたいろ〳〵の國語

問題・國字問題も、このさい、急速に解決されるであろう。時の解決であるけれども、それが國語の方向を決定する。現代が、今までの問題の急速な解決をつけてしまう時代であればあるほど、現代の國語變動は、大きいと見なければならない。これは、今まで、どちらかというと、たゆみがちであつた國語の進運を、一擧にはげますものとも見られ、國語の將來について、明るい希望を持たせもする。變動はまた進歩である。國語に生きる者としては、變動を待つたり、後から見たりするのではなくて、進んで變動の流れにさおさし、變動を改新として、進歩として、みずから推し進めるようでありたいものである。その態度からして、一方では、つねに國語の傳統に思いをいたすならば、たとえば敬語表現の生活にしても、時代に卽應した敬語生活の適正なものを得ることができるのではないか。今は、國民の全部が國語に對する良識をもつて動くべき時である。そうして、大變動期の國語を、混亂の狀態にはおちいらさないようにして、やがて、早く、新しい國語のかゞやかしい發展をみちびくべきである。國語教育としては、やはりこの現代の內容を持つた國語表現に卽して、それを率直に取上げながら、たとえば、現代の新日本建設の困難をそのまゝ表現したまじめな文章をそのまゝ取上げて、そこに時代を讀ましめ、國語をつかませるというようにすべきであろう。一つの、新憲法について述べた感想文があつて、それが、舊來の文章觀からすれば、とゝのわないものであつてもよい。そこに、現代と現代語との一斷面を認めそれを讀ましめるという讀方教育が、あつてよいと思うのである。文や文章の形式だけにこだわつた見かたをはなれて、表現そのもの、內容のある表現自體に深く入つてゆき、そこで、生きた國語を見させる國語教育、現代の國語教育をすることが肝要だと思う。現代語をつかんでの國語教育と言つても、つかむのは、內容的に國語をつかむよりはかに、つかみようはない。

現代人が現代にいて現代語をとらえるということは、じつさいに、容易なことではない。具體的な現代語を、十分に把握するということは、言うことはできても、なか〳〵行いがたいことである。しかし、そこは、考えかたによつて、のりきれるのではないか。結局は、自分の言語生活への反省をきびしくして、國語自覺を嚴肅にするということが根本になるであろう。この自覺によつて、國語現實の一角にとりつけば、そこが一角ではあつても、一つの有力な國語把握になると思う。眞の國語の自覺が、個人的なものではありながらも個性のある國語把握となり得る。國語の教師としては、みずからこの道をえらび、この道に安心を得て進むというのでよくはないか。じじつ、個人のいとなみは、どんな人でも、その人なりに要求のあることであるから、これしか、行きかたはないとも考へられる。(未完)(筆者・廣島大文理助教授)